

次の科学研究費補助金の2つの課題(以下、課題A、課題B)において、内容の重複および他者作成のプログラムの扱いに問題があると判断し、2017年1月に文部科学省および日本学術振興会に報告を行った。

A. 杉浦正利他: 第二言語習得における処理単位に関する基礎的研究

2009年度～2011年度, 基盤研究(B), 研究機関: 名古屋大学, 課題番号: 21320102

代表者: 杉浦正利 (国際開発研究科, 当時)

分担者: 木下徹, 山下淳子, 大室剛志, 滝沢直宏, 藤村逸子, 成田克史, 大野誠寛

協力者: 阪上辰也, 梁志鋭, 坂東貴夫, 北村まゆみ

※協力者は <http://dicom1.gsid.nagoya-u.ac.jp/wiki/wiki.cgi/p3kaken> に掲載されていた情報による

B. 阪上辰也: 日本人英語学習者のコロケーション知識の保持と運用に関する基礎的研究

2010年度・2011年度, 若手研究(B), 研究機関: 広島大学, 課題番号: 22720213

(2010年度は, 研究機関: 名古屋大学, 名古屋大学・国際開発研究科・学術研究員)

課題Aは理解と産出に関する2つのプロジェクトからなり¹, そのうちの1つである, リアルタイム作文記録システムによる産出過程の記録・分析のプロジェクトが, 課題Bの内容と重複している。

			2009年度 (H21)	2010年度 (H22)	2011年度 (H23)
課題A	理解	アイトラッキング			
	産出	作文記録システム		2011年に杉浦氏と阪上氏の連名で2回研究発表を行っている。各課題で2つの記録システムを開発したとしているが他方の課題のものと同じもの。	
課題B					

課題Bの研究業績・成果物の中心は次の表に示した①～④の4つである(「システムA」は参照のため大名作成のシステムに便宜的に付けた名称)。課題Aは複数の課題を含み, 多くの研究者が関わるため, 課題Aの報告書からではわかりにくい, 課題Bを基に両者を対比してみると, 重複していることがわかる。

¹ 文部科学省, 日本学術振興会に提出した文書では, 次の表を示し「3つのプロジェクトからなり」と説明しているが, 実績報告書, 研究成果報告書には脳機能測定による研究の報告はないため, 上記のように訂正した。

			2009年度 (H21)	2010年度 (H22)	2011年度 (H23)
課題A	理解	脳機能測定			
		アイトラッキング			
	産出	作文記録システム		2011年に杉浦氏と阪上氏の連名で2回研究発表を行っている。[以下略]	
課題B					

研究分担者の成田氏と木下氏は上記の表を見ているが, これまで誤りを指摘されたことはなかったが, 同時期に行われていた脳機能測定による研究は, 実際には次の研究であったようである。

C. 木下徹他: 言語課題遂行時の脳科学から見た負荷の量と質: テストでは測定できない不均衡

2009年度～2012年度, 基盤研究(B), 研究機関: 名古屋大学, 課題番号: 21320103

代表者: 木下徹 分担者: 成田克史, 大石晴美, 今井裕之, 西村秀人, 杉浦正利

従って, 課題Aのプロジェクト3つではなく2つのうち1つが課題Bと重複していたことになる。

リアルタイム記録システムの“開発”	研究発表
① システム A (作成者 大名) [右の研究で使用]	③ Sugiura & Sakaue (2011), 4月
② 新システム (作成者 杉浦) [右の研究で使用]	④ Sakaue & Sugiura (2011), 9月

- ③ Sugiura & Sakaue (2011) “A comparative study of multi-word units: Written results and writing process by English learners” 2011 Symposium on Corpus Linguistics: Exploring the Boundaries and Applications of Corpus Linguistics. The Department of English at the University of Alabama., U.S.A. (2011-04-16) [大名作成 システム A 使用]
- ④ Sakaue & Sugiura (2011) “A new learner corpus for SLA research: Dynamic Corpus of English Learners” Learner Corpus Research 2011. Louvain-la-Neuve, Belgium. (15-17 September 2011) [杉浦作成 新システム 使用]

両者の対応関係

	杉浦氏	阪上氏
2009年度	<ul style="list-style-type: none"> ・阪上氏，協力者（課題 A のサイトで2011年に記載を確認，記載開始の年は未確認） ・課題 A のサイトで大名のサイトで公開していたシステム A のデモにリンク（課題 A と無関係であることの説明はなく，大名への連絡もなし） ・実績報告書「ライティングのリアルタイム記録システムを開発し」（大名作成システム A） 	<ul style="list-style-type: none"> ・阪上他 (2009) [ポスター発表 9月30日, 10月1日] 「日本人英語学習者『動的』コーパス」の構築 [http://yans-previous.anlp.jp/symposium/2009/poster/3_poster.pdf] 【作文過程リアルタイム記録システム】 ・ Web ベース <ul style="list-style-type: none"> ・ JavaScript(キーのログ・時間取得) ・ Perl(データ管理) (システム A) ・ 課題 B 申請
2010年度	<p>4月 杉浦氏，阪上氏を課題 B の研究課題で国際開発研究科国内研究者として受け入れ</p> <p>実績報告書「リアルタイム・ログデータを20名分以上収集し分析を行い」（システム A）</p>	<p>実績報告書「ライティング過程のリアルタイム記録システムの開発を行った」「開発したシステムを用いて，日本人英語学習者20名から，作文データを収集した」（システム A）</p>
2011年度	<p>4月 杉浦・阪上連名による研究発表 (システム A)</p> <p>6月 「新システム (開発中)」 (HSP) (作成杉浦) 課題 A のサイトに書き込み</p> <p>9月 杉浦・阪上連名による研究発表 (新システム) 研究成果報告書</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「データ処理・分析作業も考慮に入れたリアルタイム記録プログラムを新たに開発しなおし」(p. 3) ・「<u>産出過程における連語表現</u>と<u>産出結果における連語表現</u>との比較分析を行った結果、処理単位としての連語表現には相違があることが明らかになった。」(p. 3) 	<p>4月 杉浦・阪上連名による研究発表 (システム A)</p> <p>9月 杉浦・阪上連名による研究発表 (新システム) 研究成果報告書</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「最終的には，HSP (Hot Soup Processor) という言語を用いてシステムの改修を行った」(p. 2) ・「最終的な<u>産出結果から得られたコロケーション</u>と、本研究で新たに構築した<u>動的コーパスから得られたコロケーション</u>の間には、その種類や頻度に違いがあることが分かった。」(p. 3)

引用中の赤字やハイライトによる強調はすべて大名によるもの。「連語表現」と「コロケーション」，「産出過程における」と「動的コーパスから得られた」は同じことの言い換え。文部科学省，日本学術振興会には詳しい情報を記載した書類（サイトの記載内容などについてはページをキャプチャしたものを含む）を提出している。

課題 A²

- ・ 2009年度実績報告書 <https://kaken.nii.ac.jp/ja/report/KAKENHI-PROJECT-21320102/213201022009jisseki/>
- ・ 2010年度実績報告書 <https://kaken.nii.ac.jp/ja/report/KAKENHI-PROJECT-21320102/213201022010jisseki/>
- ・ 研究成果報告書 <https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-21320102/21320102seika.pdf>

課題 B

- ・ 2010年度実績報告書 <https://kaken.nii.ac.jp/ja/report/KAKENHI-PROJECT-22720213/227202132010jisseki/>
- ・ 研究成果報告書 <https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-22720213/22720213seika.pdf>

² 文書末の追記に書いた通り，課題 A の 2009 年度実績報告書と研究成果報告書には書き換えがあり，現在閲覧できる文書には，上記の表の引用の文言と一致しないところがある。

・各課題の代表者が他方の課題について承知していること

両氏とも他方の課題の研究分担者とはなっていないが、(a) 阪上氏は 2011 年まで協力者として課題 A のサイトに名前が掲載されており、また、(b) 杉浦氏は、2010 年 3 月で国際開発研究科特任助教の任期が終了した阪上氏を、補助金受給のために同年 4 月に課題 B の研究課題で国際開発研究科の国内研究者として受け入れており、杉浦氏も阪上氏も他方の課題について知らなかったということはありません。

・各課題で開発したとされる新システム (HSP) が同一のものであること

課題 B の改修後のシステムが課題 A の新システムと同一のものであることは、このシステムを使用した研究を 2011 年 9 月に阪上・杉浦 2 名の連名で行い、それを各課題の業績としていることからわかる。さらに、阪上 (2015) の次の記述から、作成者は杉浦氏で、課題 B で開発されたものでないことが確認できる。

阪上 (2015) 「第二言語習得研究のための新たな学習者コーパス構築」(p. 143)

データの収集にあたっては、杉浦正利氏 (名古屋大学) が作成したキーボード入力の記録システムを一部改変して利用している。このプログラムは、Hot Soup Processor (HSP) という言語によって作成されており、文字がタイプされた際の文字やその時の時間をミリ秒単位で計測することにも対応している。

[http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/3/38963/20160128135557681899/BullGradSchEduc-HiroshimaUniv-Part2_64_139.pdf]

・両課題で使用されていたシステム A (HTML, JavaScript, Perl) が大名作成のものであること

以下のことから、杉浦氏達を使用していたのが大名作成によるシステム A であると判断できる。

- a. 杉浦氏らが大名作成のものであることを認めている。
- b. 大名が作成したことを示す、杉浦氏らを含む関係者の中でのメールのやり取りの記録がある。
- c. 杉浦氏が課題 A のサイトで大名のサイトのシステム A のデモにリンクを張っていた。

課題 A のサイトでは「リアルタイム作文記録システム」として大名のサイトのシステム A のデモにリンクが張られていたが、最終年度の 2011 年 6 月に「新システム (開発中)」と書かれ、システム A は「旧システム」とされた³。少なくとも 2011 年 4 月発表の Sugiura & Sakaue (2011) まではシステム A を使用していることになる。

・システム A に関し当該研究者の了解も適切な表示もなかったこと

研究発表、報告書で記録システムを「開発」したと述べているが、システム A の作成者が各課題とは無関係な大名であることへの言及はない。課題 A のウェブサイトではシステム A のデモにリンクが張られていたが、システム A が課題 A と無関係な大名によるものであり、課題 A の成果物ではないことの説明はなかった。

「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」(平成 26 年 8 月 26 日 文部科学大臣決定) では次のようになっている。

研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/08/_icsFiles/afiedfile/2014/08/26/1351568_02_1.pdf

③ 盗用

他の研究者のアイデア、分析・解析方法、データ、研究結果、論文又は用語を当該研究者の了解又は適切な表示なく流用すること。 (p. 10)

³ 課題 A のウェブサイトは研究成果報告書にも URL が記載されているが、サーバー自体が停止され、現在では閲覧できない。なお、サーバーの管理者は研究代表者の杉浦氏である。

どちらの課題でも、研究発表および報告書において、記録システムの「開発」を謳い研究の成果としていたが、当該研究者(=大名)からの了解も適切な表示もなく、問題があると判断し、内容の重複も含め、2017年1月に文部科学省および日本学術振興会に報告した。現在、このような補助金の申請、受給が認められるのかについて、日本学術振興会の回答を待っているところである。

なお、この問題をウェブサイトで公開することについては、当初、躊躇もしたが、科学研究費補助金の取得という公益的な問題であること、また、「名古屋大学における公正研究遂行のための基本方針」において「本学構成員は、不正行為が行われている、ないしは、行われたという確信がある場合は、それを放置しない倫理的義務がある。」とされていることから、ここに公開に踏み切ったものである。

※追記

本文書作成中に報告書の文言の再確認を行った際、課題 A の報告書の以下の箇所の記述が変更されていることに気づいた。(引用文中の赤字による強調は大名、以下同様)

- 2009年度「実績報告書」の「研究概要」の「平成21年度は、産出に関しては、」に続く部分。

変更前：ライティングのリアルタイム記録システムを**開発**し、

変更後：ライティングのリアルタイム記録システムを**使用**し、

<https://kaken.nii.ac.jp/ja/report/KAKENHI-PROJECT-21320102/213201022009jissekki/>

- 「研究成果報告書」の p.3 「4. 研究成果」の「平成21年度は、産出に関しては、」に続く部分。

変更前：ライティングのリアルタイム記録システムを**開発**し、

変更後： **研究代表者及び同研究科の大名力氏らが共同開発してきた**

ライティングのリアルタイム記録システムを**使用**し、

<https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-21320102/21320102seika.pdf>

変更の経緯はわからないが、この報告内容の変更により⁴、システム A を課題 A で開発したと述べていたことが事実でないことを研究代表者の杉浦氏が認めていることが確認できる。

課題 B の報告書には変更はなく、現在もシステム A (研究成果報告書では「初期型の記録システム」) を課題 B で開発したことになっているが、こちらも実態と異なることになる。

- 「2010年度 実績報告書」の「研究概要」

次に、ライティング過程のリアルタイム記録システムの**開発**を行った。

<https://kaken.nii.ac.jp/ja/report/KAKENHI-PROJECT-22720213/227202132010jissekki/>

- 「研究成果報告書」

平成22年度には、ライティングの過程を記録できるシステムを**開発・導入**し、(p.1「研究成果の概要」)

(1) ライティング過程記録システム開発

まず、ライティング過程のリアルタイム記録システムの**開発**を行った。(p.2「3. 研究の方法」)

<https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-22720213/22720213seika.pdf>

HSPによる新システムの作成は2011(平成23)年6月以降のことであり、2010(平成22)年度の報告にある記録システムはシステム A のことになる。また、阪上(2015)は新システムの作成者を杉浦氏としていることから、新旧どちらの作文記録システムも課題 B で開発したものではないことが確認できる。

⁴ 「研究代表者及び同研究科の大名力氏らが共同開発してきた」という表現は実態に則したものではないが、この点についての説明は本文書では割愛する。

※2017年6月10日追記

課題Bの研究成果報告書の「4. 研究成果」では言及はないが、「5. 主な発表論文等」の〔雑誌論文〕に掲載されている次の論文もリアルタイム記録システムを用いた研究である。

Matsuno, K., Murao, R., Morita, M., Sakaue, T., and Sugiura, M. (2010). Production units in English writing: A comparative study of writing fluency between native speakers and non-native speakers of English. in Hirakawa, M. et al. (eds). *Studies in Language Sciences*, 9, 査読有, pp. 143-159. Kuroshio Publishers.

これは、2007年の次の口頭発表を基に論文としてまとめたもので、大名の名前が入っていることからわかるように、システムAが使用されている。

松野・村尾・森田・阪上・村木・**大名**・杉浦(2007)「統語的観点から見た英文ライティングにおけるポーズ位置の分析:英語母語話者と日本人英語学習者の比較」言語科学会第九回年次国際大会.

ジャーナルへの掲載は2010年であるが、実態は課題B開始以前のもので、pp. 1-2の説明では課題Bの業績・成果物に含めていない。本文書および報告書だけでは詳しい事情はわからず、課題Bの成果を過小評価するために、あるいは課題Aとの重複の割合を高く見せるために、上記論文を外しているとの誤解を生む可能性もあると考え、補足して説明しておくことにした。

なお、〔学会発表〕欄に掲載されている次の発表は、課題Aの「理解」に関する研究の業績と同じである。

Sugiura, M., Yamashita, J. Leung, C.Y., Bnado, T., & Sakaue, T. (2012). Do L2 Learners Have the Same Collocational Knowledge as L1 Speakers? Evidence from Eye-tracking Data. American Association for Applied Linguistics 2012 Boston, USA. (2012年3月24日)